

ソ連の保育所と幼稚園



斎藤文雄

ジュネーブの世界保健機構(WHO)発行の PUBLIC HEALTH PAPERS NO. 11. は、

MATERNAL AND CHILD HEALTH IN THE USSR, 即ちソ連の母子衛生という題目で、一九六〇年世界中の一七か国から一九人のメンバーがソ連の四地区にわたり親しく視察旅行を行なった報告書である。発行は一九六二年である。七〇頁ばかりの冊子であるが、その中の母性衛生面の国家施設は誠にすばらしい。しかしそれは本誌に関係の少ないことであるので省略しよう。小児保護政策の中の一部、即ち本誌に関係のある範囲の幼児施設についての記事を紹介し、あわせて見解を述べてみることにする。

母子保護のためのソ連での近代的な組織としては病院と子どもの健康管理に必要な特別なサービスを行なう外来施設(Polyclinics)を併せた総合施設である。この中に託児所、幼稚園、幼児ホーム、学

校の医学サービス機関が含まれる。この施設の数は一九五九年に七七〇〇以上である。

この中にある病院は他の国の小児病院の形態をととのえているように、小児内科、耳鼻咽喉科、皮膚科、精神神経科、口腔科、物理療法科、体操科などの医療施設と共に、ミルク配給所、母親学校、母親のための法律相談所などを備えている。

この総合施設の院長は医師であり全体にわたっての小児保健に責任をもち、院長の下に各部所の責任からなる会議と、各組織代表者と母親で構成される有志委員会があつて行政に関与する。外来施設はいくつかの地区を受け持っており、各地区は一年以下の子四〇〇〜四五人を含めて〇〜一四歳の子ども八〇〇乃至一〇〇〇人で構成される。これを一人の小児科医を一〜二人の看護婦で処理する。したがって医師の選択は不可能である。母子総合施設にとめる小児科

医の数は外来地区施設の数よりも多いので医師は順番制で病院勤務を毎二年ごとに四か月間は行なわなければならない。地区に出た小児科医の勤務時間は季節によって変化するが七時間、外来施設での相談二時間、子どもの家庭への訪問四時間、健康教育のために費す時間が一時間である。

モスコウのカリーニンの総合施設は一四地区を管理し一三〇〇〇人の子どもを対象としている。各地区約八五〇人、うち一年以下四〇〇四五人。この中で外来施設として八保育所、二四幼稚園、一二学校が含まれ、予算約三七〇万ルーブル（一ルーブルは約九〇円である）、職員三二四人（医師八三、看護婦一七三、看護保育関係者三九人、事務員二九人）。

地方では人の集団がまばらなので都会とは多少違った組織を持っている。地区助産婦の管理下にあり、一人の助産婦の受け持ちの子どもの数は二五〇三〇人、年に数回はみるようになっており結果は地区医師と州の小児科医の点検を受ける。

乳幼児のための施設は非常に多いが、それでもまだこどもの人口の一部を補っているにすぎない。施設収容の目標は家庭で面倒をみられない子どもを預って、女子労働者や学生を助けるためであると同時に、子どもたちに早くから社会生活の基礎を植えつけようというところにある。しかし子どもたちを家庭から離してしまうことは考えていない。子どもたちは種族や社会的地位などで分けることは

しないで、年齢だけによって組が作られる。七歳以下の健康児に対しては、保育所、幼稚園、幼児ホーム、母子ホーム、異常児センターなどの施設がある。現在保育所と幼稚園は別々になっているが、総合する試みがモスコウで行なわれている。

保育所（*Creche*）常設と季節に分れるが一九五九年には視察した三地方で計二二〇万余の子どもが保育所に入っている。（ウクライナ一八万、ジョーシア一万五千、ウツベキスタン六万三千）しかしまだ不十分で一九六五年までに二倍にする計画が進行中である。農村では母親が農場にいる間世話をする季節保育所がある。

（ジョーシア五〇〇、ウツベキスタン八〇六〇あり、それぞれ一〇七〇〇、二〇万の子どもを収容していた。）もちろんこは、母親が外に働きに出る、学校に行くというような場合、三歳以下の子どもを収容する施設であるが、母親の産後の休み（妊婦は職業を離れることなしに産前五六日、産後五六日、計出産を中心に一二日の有給休暇があり、事情によっては更に延ばすことができる）、母親の年間休暇などを計算に入れると三か月より小さい子が保育所にくることは先ずないという。母親の便宜のためこどもは家庭から保育所までつれて来てやるが、母親の就労工場に保育所があったり、農村では集団農場にもうけられたりする。保育所は一週間の中六日間開き、数時間預るものと、二四時間預るものとある。大体(1)の時間預かる。母親の労働時間+買物時間。(2)保育所と家庭の距離が遠い場

合はより長時間預かる。(3)母親が旅行をする時、夜間働く時は二四時間預かる。大体六日間預って日曜祭日などには家庭に帰る。保育所では三〜一〇か月、一〇か月〜一八か月、一八か月〜二年、二年〜三年の四群に分けるが、各々の組の人数は一五〜二〇人で、伝染病の予防には大いに神経を使っている。各組とも別々の建物を利用、その応接室には授乳室と隔離室がついている。着替え室、食堂にも利用される遊戯室、手洗いと便所のついた各室。季節によってベッドはベランダの外気の中に、または窓を大きく開いた部屋におく。台所、事務室、医療室は共通であるが遊ぶ場所は各群別々におく。日よけをした庭が与えられ、どこにいても保育がみつめられるように遊ぶ場所だけ一段高くなっている。保育所の職員は小児科医、看護婦、保育(音楽教師を含む)看護助手などで、大きな保育所の長は小児科医、小さなところは看護婦がつとめる。大休五人の子どもに二人いるが、子どもが小さいものばかりだと二人以上の職員になる。このほか下働き、書記、料理人がいる。

入所前の子は外来施設で体格検査を行ない、その健康カードは保育所に送られる。保育所の保育は家庭訪問を行ない、予め顔なじみになっておき、あまり突然に子どもの習慣が変化することのないように、そして同時に子どもの環境条件を視察する。保育所での始めの数日は家庭での子どもの生活を変更することなく観察され、やがて徐々に各組の生活様式に持ちこまれる。栄養、睡眠、一日の日課

は子どもの年令健康発育程度に応じて細かい指示が行なわれる。

乳児は特別な部屋で母乳が与えられるが、幼児は、一日一六〇〇〜一八〇〇カロリーのバランスのとれた食事が与えられビタミンも添加される。食物のよしあし、献立の適否を判断するのは小児科の仕事である。子ども一人一日の保育費は一ニループル(約千円余)であるが、食事は幼児一人当り、およそ次のような食品(一五八〇カロリー)である。

バター三〇g、パン二〇〇g、砂糖四五g、チーズ三〇g、卵二分の一、マカロニなどの材料に使われるシモリーナ一五g、米一五g、獣肉五〇g、馬鈴薯二〇〇g、小麦粉三〇g、牛乳三〇〇g、野菜三〇g、スプレッド一五g、果物三五〇g。

もちろん保育所は甘やかしの施設ではない。特別に訓練された保育者がいて早くからの訓練が行なわれ、ことばの訓練社交的な訓練記憶の練習リズムカルな身体的運動などが各グループに応じた音楽と共に行なわれる。医学的な監督としては定期的予防注射(出生時三、五、七日目にBCG、二か月ポリオ、三か月種痘、六〜八か月ジフテリア・百日咳、一年半ジフテリア・BCG・ポリオ、四才種痘、七才ジフテリア・BCG、九才ジフテリア、一二才ジフテリア・BCG、一八才BCG)、伝染病予防についての厳重な監視。時々子どもの組の入替を行なうが、これは人に慣れさせ精神的なまごつきを少なくするための訓練である。時には二つの組に三人の保育者が

てその中の一人がこどもといっしょに他の組に移っていくこともある。保育所はまた衛生教育の場でもあり、母親学級や両親学級もここで開かれる。

三年目の終りにはこどもは保育所を出て幼稚園に行く。この際場所と先生が一度に変わってしまうが、その感情的な激動をさけるため保育所の保母はこどもといっしょに幼稚園にいたり、連れて帰ったりして徐々に慣らしていく。保育所の健康カードは当然幼稚園に送られる。こどもが保育所から家庭に帰る場合は引続き小児科医と保母は両親との接触をつづけて、子どもの食生活や育て方について指導していく。

三歳から七歳の子は幼稚園に行く、一九五九年ソ連の幼稚園数は三九八九〇か所、現在七年計画で倍化運動が展開中。幼稚園は文部省の管轄であるが医学的な監督は外来施設の小児科医によって行なわれる。幼稚園児は三〜四歳、四〜五歳、五〜七歳の三群に分けられ一組約二五人、ひとつの部屋をもつが保育所のようにやかましい隔離はない。建物は保育所とあまり変りがない。職員はこども五〜八人について一人の割合である。幼稚園の予算は一か所二〇〇〇ルーブル、こども一日一人当り六ルーブル（五四〇円）。親は稼ぎに応じて二〇〜二〇〇ルーブルの支払をするが、結婚していない母親などで一月五〇〇ルーブル以下の収入しかないものには Trade union つまり生産団体の組合が支払ってくれる。

幼稚園は朝八時から夕方八時まで。毎朝看護婦が検査して体温をはかり、皮膚と咽喉をしらべ、病気の疑いのあるものは隔離するか家にかえすか、病院に入れる。各組とも自分の部屋と日課をもつが幼少群は一五〜二〇分、大きい子は四〇〜四五分の授業時間で、記憶力の練習、ことばの練習を行なう。屋外での体育や競技も行なわれる。三か月に一度徹底した医学的検査が行なわれ、医師は子どもの栄養や一般衛生状態についても監督している。

両親が子どもを育てられない場合、みなし児などの三歳以下のものは幼少児のためのホームに収容される。三歳以上の子は文部省の管轄の小児ホームに収容する。これについては詳述する紙面が無くなった。

以上保育所と幼稚園についての記載のみを抄録してみたが、これらのわが国との比較を論じているゆとりが無い。ただ一言だけ言い得ることは、現在の日本ほど物資が豊かでないといわれるソ連が、こどもどものこととなると国をあげておしみなく経費を投じて立派な施設の拡充に努力している事実と、保育所と幼稚園という両者の関係が判然と分れていかもなだらかな縦の連絡を持ってよみなく子ども達の生活を伸ばしているという事実、これらの点では先進国であった日本が現在では明らかに後進国となってしまうだけで、もっと広い立場からこどもを中心とした一切の施設が考えられなければならない。